

ある狂詩曲

「よおー」

シュラ・コーツは、目前に立つ、並外れて背の高い男の腫れた右頬と肩に担いだ荷物とを交互に見やり、グツと眉間に深い皺を刻み、そして深い溜息を付いた。

季節は盛夏から晩夏へと流れ、シュラがクイーンズベリへの帰寮まで残すところ一週間を切った日の事だった。自室にて、楽器を弾くときのみ使用するクーラーの低い唸りの中、シュラはチェロの下腹に響く深い音鳴に意識を集中し、五年間在籍した大オーケストラでの有終の美を飾るべく、イギリスの誇る作曲家、エドワード・エルガーのエニグマ変奏曲「第十二変奏 Andante B.G.N.」を入念にさらっている最中だった。一連の旋律を押し退け、無料としか形容しようのない第三の音が、鋭くシュラの耳に届いた。呼び鈴であるプザーの音だ。

シュラの父、レフ・アルカージエビッチ・コーツは外科医としてロンドン市内で開業し、母、アイリーン・マーガレット・コーツは一九八六年一月にロンドン取引市場に上場したザ・ボデイショップのカムデン店のマネージャーとして辣腕を振るっている。兄弟はいない。

ロンドンの中心、ピカデリー・サーカスから二十分程北に上ると詩人キーツの暮らした家屋の残るハムステッドがある。

ロンドンでも人気の高い高級住宅地の一つだ。緑が多く、緩やかな丘陵地に、ゆつたりとした品のある懐かしい面影を色濃く残した住宅が立ち並ぶ。日中、この閑静なカントリーサイドの、三大家族には十分なほど優雅にしてゆとりのあるコーツ家には、シュラ、彼一人しか居ない。

二度目のプザー音が長く、しつこく階下から響いた。シュラは、舌打ちを眉間に力を含める事で押さえ、細い階段を下り、歓迎されざる訪問者の姿を確認すべくドアにある覗き窓に顔を寄せた。寄付や訳の分からない勧誘の類なら、己も十分に威力を知るその冷たく切れ上がった目で、相手に一言の猶予も与えず凍りつかせてやろうと、目を睨めて細長い窓から明るい外の世界を見た。

と、そこには男が一人居た。薄いTシャツ一枚を着て背を紅い煉瓦に預け、両腕を組み顔を俯かせている。癖の無い栗色の伸びた前髪が男の表情を隠していた。随分と香が高い。

男は暫くじつとしていたが、やがてふつと顔を上げて無造作に腕を伸ばし、シュラの耳に、プザー音によるエルガーのチェロコンチェルトの広く知られた出だしのリズムが耳煩く響いた。ピープ音に音階などありはしない。しかし、遅えようも無いほどに完璧な拍子で、それは続いた。

五回目の出だしに戻った時点で、とうとうシュラは耐え切れなくなり真鍮のドアノブを引いた。

むつとする気温と共に、足元に転がっていたザックを、身を折るようになって肩に担ぎなおしたアイオロス・エインズワー

すが、シユラに向けて短く声を発し嫌になる程見慣れた「ニヤリ」としか形容出来ない笑顔をシユラに寄せた。

「お前、いつもギリギリにしか寮に戻らないだろう？ それまで置いてくれ」

取り敢えず家の中に通し、リビングか自室かどちらか迷った末に、自室の方に邪魔としか形容出来ないほど無駄にデカイ同寮かつ一昨年までの同室である男を通し、シユラはアイオロスを冷たく一瞥した。

アイオロスは勝手にシユラの勉強机の前にあつた椅子を引つ張り出し腰掛けてから、母親に家を叩き出されたのでシユラの帰寮までの間宿を貸して欲しいと、ひよつと一つ肩を竦めて見せて頼んだ。

「まあ、今あつちに帰つてもいいんだが、もうちよつとバイトして金稼ぎたいからな」

アイオロスは、飄々と言葉が続け、シユラが開いていた楽譜にひよいと指を伸ばしペラペラと捲つてから真面目だなあ、と一言呟いた。楽譜にはびつしりと几帳面な文字で注意書きが書き込まれていたからだ。

「……何をやつた？」

聞くか聞かぬか迷った末に、アイオロスのあまりにも飄然とした態度に感じるものがあり、シユラは結局アイオロスに

尋ねた。すると、アイオロスは、琥珀色の瞳から無邪気な色をさつと消してそれを細めると面白そうに笑つた。シユラが己の好奇心に負けたという事は、彼の申し出は受託されたも同然だからだ。

「夏期休暇の前から、同棲してた彼女と別れたから取り合えず家の敷居を跨いだら、切れた弟にぶつたたかれた上に、ヒステリー起こした母親に追い出された」

まったく悪びれた様子無く、さらりと未成年にあるまじき、そしてシユラにとつては恥部の範囲に入る家庭内の事情が非常に簡潔に語られた。当のアイオロスは、にいつと唇を引いてシユラの次の出方を窺っている。

シユラは、また深く溜息を付くと一瞬顔を閉じ、次には身を捻つて参考書や専門書をきちんと整理して並べてある机の引き出しから、一通の手紙を取り出し、その封をアイオロスに見せた。差出し人の名前を確認するまでもなく、その流麗な筆跡から、一目でアイオロスにはそれが誰であるか判じられた。

あまりにも見慣れた手の筋だ。サガ・チェトウインド。

「先学期のAレベルテストで全てスターAを取ることが出来たので、復学しないとある。十二月の定演も辞退するぞうだ」

漆黒の瞳で反応を向うシユラの先で、アイオロスは束の間目を伏せ上品に薄く青みがかった白い封筒に視線を落とすと、直ぐに首を立ててシユラの目を見返した。

「つまり、お嬢様は自主退場するという訳か」

「……そうせざるを得ないよさな状態に追い込まれたのでなければ『自主』だろうな」

シユラも揺るがぬ視線をアイオロスに落としたままそつけなく言つた。

アイオロスは、シユラの言葉にちよつと目を見開いた。他人のプライベートには決して踏み込もうとしないシユラらしくないもの言い方だったからだ。もつとも、先にアイオロスに「何があつた」と聞いてきた時点で首を突つ込む腹を括つたのかもしれない。

「どんな要因があつたとしても、最後に決めるのは自分だ。物理的、心理的強制や制約があつたとしても、どこかで自分が納得出来なければ『決める』事は出来ない。答えを出すのはいつだつて自分でしかないだろう？」

アイオロスは、ボン、と手紙をシユラの机の上に置くと、俺夕方からバイト入つてるんだけど、とシユラに言つた。ついでに適当に服も貸してくれ、と。

一瞬、このまま家から叩き出してやろうかと表情を硬くしたシユラに、アイオロスは、もう一度口の端を上げて笑みを見せた。

「ま、自分でいくら決めたつて、外的要因から決意が変わることなんて珍しくないと思うけどな。取り合えず、お前は考え直したらどうだつて返事したんだろ？ 後は、まあ行つてるとしたらアンドリユーか。あいつならなりふり構わずお前の百倍力んで泣きついていいるだろう……これ以上は実際に学

期が始まつてからの状況を見ないと仕方ないだろう？」

何時もながら、不真面目に冷めているのかと思えば、考えることは驚く程早的を得ていて無駄が無い。シユラは感嘆を隠してゲストルームにアイオロスを案内する為に強張つた息をそつと吐きながら足を動かし一つの疑問を口にした。お前の所には何も届かなかったのか、と。

すると、アイオロスは、この日初めて心底情けない、という顔をして答えた。

「ああ……、あつたのかもしれないけれど、なにせ今朝初めてこの休暇で家に帰つたし、帰つたつて言つても玄関口で散々物品投げつけられて、その上これだから……自分の服取りに部屋にも辿り着けなかつたのに、手紙なんか確認する暇あると思うか？」

腫れた右頬を指差しながら答えるアイオロスに、シユラはこの日二度目の深い溜息を吐いた。

「その歳で家人にそこまでの心労をかけるのもどうかと思うがな」

「だから、大人しく殴られてやつたじやないか。握り拳で殴つてきたからな。流石に口の中切れた」

シユラは、拳で殴られてその程度の傷かお前の面皮の厚さには呆れる、と言ひ返しかけてその言葉を飲み込んだ。この程度の言葉にアイオロスが感じ入るわけがないし、それなら言葉を発する分だけ自分の労力損だと判断したのだ。

甲高い、まだ声変わりしていない少年たちの声が響く廊下を渡り、事務室で今学期からの部屋と鍵、一・二・三の書類を取った後、アイオロスは伝統ある芝生を横切り最短距離でミス寮に到着すると、新しく割り当てられた部屋へ向かおうと談話室などには立ち寄りせず、直ぐに螺旋階段に足を乗せたと、頭上から初めて聞く大声が自分の名前を呼び捨てにした。考える間も無く頭上を振り仰ぐと、そこにはよく見知った色があった。

踊場に設けてある細長い窓から差し込む光を受けて夏の光より明るく輝く金色と、一点の曇りなく澄んだ青い色。ミロ・フエアファックスだ。

成る程、とうとう声変わりしたか。

どんな祝いの言葉を投げてやろうか暫しアイオロスが頭を働かせている間に、ミロは階段を駆け下りアイオロスの前に立ち、掠れた声で言った。

「ロス、サガとは仲直りしたのか？」

ミロは一旦言葉を切り、一度喉を湿らせてからまた言葉を続けた。

「サガ、まだ学校に来てないみたいだけれど……」

農場の仕事をギリギリまで手伝い、ミロもアイオロスと同じく今日、クイーンズベリに帰ったのだ。

夏の初め、カミュ・パロウがニア・ソーリーに二週間滞在了した事は、彼にこれまで感じたことのない大きな幸福感をもたらした。長い夏季休暇が終わればまたカミュ・パロウと会える。その期待と透明な希望に満たされた夏だった。そしてその事が彼に元気のなかつた上級生、サガ・チエトウインドの存在を忘れさせた。

声変わりの始まった不安定な声と、ひよろりと伸びた背夏の間を訪れた待ちに待った、これまで同年の少年たちからも感じるばかりだった大人への階を誇らしく思いながら、尊敬と敬愛の対象であるサガの存在を探してみれば、彼の影はどこにもない。今ですっかり念頭から外してしまっていた悲しげだったサガの姿が、後悔の念と共に一気にミロの胸に蘇り、不安となじ交ぜになつてミロを揺さぶつた。

「あいつはもうAレベルテストを受けちまつたからな。必須科目も残つてねえし、まあおんびりしてんじやないか？」

口の端を大きく引き上げてアイオロスはミロの金色の頭をわさつと掴むと、いつものようにかき混ぜようとした。が、絡まつた髪に指は囚われ動かない。

「おい……この髪は、少しは手入れをしているのか？」

まじまじと、ハウス・マスターのベネットに秘かに『黄金の狼』と称される少年を見下ろしながら、冷や汗と共にアイオロスは言った。

「いつもは母さんが切つてくれるんだけど、今年はまだ帰つて来てないから……」

いや、髪を切る切らないという次元の話ではなく……、とアイオロスは思い、ミロの後ろに控えていたカミュは、まだ母親が里帰りから戻つてこないという状況に体が冷えた。もつとも、ミロはどちらの思惑にも気付かず、アイオロスが返した答えを自分に納得させる作業に没頭しているのだが。

と、そのミロの両肩が突然がっしりと掴まれた。虚を突かれたミロが飛び跳ねるようにして振り返ると、そこには往年の名クォーターバック、ステファン・ベネットが立っていた。「チエトウインドはオール・スターAだったさうだよ。是非同僚の諸君にはそれを励みにしつかりと今学期も勉学に勤しんで欲しいね」

朗らかにして堂々とした体軀のハウス・マスター、彼の太く分厚い手で肩を抑えられる形になつたミロは、じつと身を竦ませていたが、サガがオール・スターAを手に入れたと聞いた時、青い瞳を零れ落ちるほど真円に見開き、ばあつと顔を紅潮させた。

「すっげえ！」

身を捻つてカミュに振り向き共感を得ようとする。それにカミュは静かに微笑んで頷く事で答えた。が、彼の胸にはミロの熱とは正反対の、冷たい無念のようなものが静かに広がっていた。

最後に、サガと二人きりで対話した時、彼は自分の胸のう

ちを吐露する事と引き換えに、サガの心の奥を垣間見る事になった。その時に彼が口にした言葉が、カミュの胸を緩く締め付けた。

「エインズワース、ちよつと時間をもらえるかなう？」

ベネットがにこやかにアイオロスにさう尋ねたのを白図に、ミロとカミュはその場を辞した。

随分と身長伸び、今ではカミュ・パーローと並ぶ程にまでなつているミロ・フェアフックス、二人の少年の後姿に、ベネットの唇には微笑が浮かんだ。

前年度、同室の二人は衆目を集めるような派手な喧嘩騒ぎを起こしたが、今ではその片鱗など微かにも見えはしない。

この年代の喧嘩など、そんなものだ。いや、そんなものでなくてはいけない。

ベネットは、自分の身長などつづく昔に追い抜いて、今は背筋を伸ばし前を見据えて歩くアイオロスに密かに視線を走らせ溜息を飲み込んだ。

「楽にしてくれたまえ」

ベネットは、アイオロスを自宅の書斎に通すと珈琲の入つたマグカップを二つ持つてソファに深く腰を下ろした。

アイオロスはベネットの言葉を受けて、それまで漫然と眺めていた彼の蔵書の背表紙から視線を離し、ベネットの向か

いのソファに腰を下ろして彼の差し出すマグカップを受け取った。

「今年から君とは正式にアルコールを酌み交わせるわけだが、まだ肩問だからね」

悪戯をする子供のようには瞳を輝かせて、ベネットはちよつとカップで乾杯する仕草を試みせた。

アイオロスも少し口の端を上げてそれに答えると、ベネットは、さて、とカップをティーテーブルに置いて両手を組み合せてアイオロスの方に身を屈めて話を切り出した。

「実は、何度が夏季休暇中に君と連絡を取ろうとしたんだが……うまくいかなかったね。新学期が始まってからこんな話で申し訳ないんだが」

ベネットはじつ、とアイオロスの瞳を覗き込んで話を続けた。

「チエトウインドの事なんだ。どうやら君はコートツの家に居たようだから知っていると思うんだが……中退を申し出てきたよ。彼は、前年度でアレベルテストを全て最高の結果で終了している。学校側では彼に首席の地位を申し出たんだが、断られてしまつてね。そうすると、次席だったシユラ・コートツが首席、監督生に君を、という順繰りになるんだ」

話を一旦切つて、ベネットはアイオロスの動向を探つた。彼はそんなベネットの様子に苦笑をもらして答えた。

「生徒が、一年早くクイーンズペリでの卒業を終り出来るだけの結果を取め、本人もそれを希望している。それの何処に

問題があるのか、話がよく見えないんですか？」

時々、この生徒と話しているともつと老成した実業家か何かと話しているような心持にベネットはさせられる。落ち着いていて、自信があり、抜け目がないのだ。

「全く、君にそう言われてしまつてそれで終わつてしまふんだがね」

ベネットは苦笑を隠さず、その表情を崩した。

「……コートツがね、チエトウインドが戻つてくるのなら首席の座は彼に譲ると言つて今は一般生徒と同じ部屋に入つているんだよ。君の言によると戻つてこないと言つている生徒の為に、だ。学期はもう始まつているのに」

「そりゃ、コートツが問題の生徒が戻つてくる可能性有り、と踏んでいるからじゃないですか？」

「君もそう思うかね？」

「俺は何時から占い師になつたんですか？」

人を食つたアイオロスの返事にベネットは息を深く吐いた。

「エインズワース、私はね、学校は勉強をする為だけの場所じゃないと思つているんだよ。ましてここは全寮制の学校だ。学ぶものは点数に換算される勉強だけではない。取えて、言い切つてしまえば、人生だよ。人生を学ぶ為に、我々はこの性格も好みも、バックグラウンドも違う同年代の少年たちが集つて、大人からは学べないものを、彼らどうして学びあつていく。十三歳どうしの付き合いは、十三歳のときにしか出来ない。十九歳どうしの付き合いは、今、この時を逃したらもう二度

と出来ないんだよ。人生のどこにもそんなチャンスは再び巡って来はしないんだ。それを棒に振ってしまふとは、いかにも惜しくはないかね？」

アイオロスは、この熱意溢れる教育に注意深く自分の心の動きを悟られないようにしながら答えた。

「俺に言ってもしかたないでしょう？ それはその問題の生徒に貴方が言いたい言葉なんですからね」

バスン、とベネットはクツシヨンの効いた背もたれに一度背を預け言った。

「大人という立場から言っても、届かないんだよ。言葉が届くにも条件がある。彼の今の状況では私のような者の言葉は、彼もよく分かっている見識の一つにしか過ぎない。そんな言葉は、人の心を動かさしはしないよ」

「だから、何だと言うんですか？」

再び背をソファから引き剥がし、ベネットはアイオロスの榛色の瞳に視線を合わせた。

「君は、何もしないのかね？ エインズワース」

まだ、彼ら二人の間にある罅は、この物分りのよい青年の心から消えないのだろうか。ベネットは憂いの表情でアイオロスを見つめた。

アイオロスは、すつと視線を右の天井に走らせると、「にやり」とした表情と共にベネットに向き直った。

「シーファは五枚以上の紙を使って翻意を促したって言つてましたよ。まあ、コーツも手短かに再考を促してみたいですね。

多分、オケの連中もほつとかないでしょうし……」

「私が聞いているのは君のことなんだがね？」

ベネットははぐらかして答えないアイオロスの言葉を軽く遮った。

「俺は、つい最近までその話知らなかつたですから。何かをずるとかしないととかというつていう範疇にそもそも入れないで欲しいんですがね。——ところで、俺をわざわざ呼んだのは、そういう話があっただけではないんじゃないですか？」

アイオロスは、困つた人だなあとというような笑みをのせてベネットを見返した。

「ああ、そうだった——聞きたいのは、君自身のことだよ」

ベネットは、少し大袈裟に首を竦めてみせた。

「つまり、筋書きはこうだ。少々長くなるが、まあ、最後まで聞いて欲しい」

もう一度、カップの珈琲で喉を潤し、ベネットは姿勢を正した。

「教授会は今年六月の時点で、チエトウィンドを首席、ということでは全会が一致していた。次席のコーツは監督生、君も実は寮長に推薦されていた。ところが、チエトウィンドのAレベルの成績が望みうる最高成績だったことから、チエトウィンドが復学しない可能性が出て来た。そうなる、先にも言ったように、コーツが次席繰り上がりで首席になり、もともとコーツが推薦されていた監督生は空席になる。

君に関しては、特に昨年は色々も問題もあつて意見が分か

れたが、コーツの穴を埋められる人間はやはり君以外にないだろう、という結論で落ち着いた。そして、そうこうしている間にチエトウインド本人から復学しないと連絡があり、人事は殆どこの案で固まりかけていたんだ。

ところが、コーツが素直にこれを受け入れなかった。一時首席を預かるが、チエトウインドが戻つた際にはこれを彼に譲り、自分は役職から外れる、と言つて来たわけだ。

君も知つている通り、首席、監督生はスクールの顔でもある……彼ほどの学生をフリーにさせておく、というのは、学内に対しても、学外に対しても容認出来ることではない。更に、そう主張するのがあの客観的なコーツだということで、チエトウインドが本当に戻つて来る可能性があるのか、ということとで教授会は紛糾したんだよ。教授会としては、スクールの顔にもつとも優秀な学生を置きたい。コーツも勿論優秀だが、チエトウインドは群を抜いている。スクールの宣伝にこれ以上に入材はないからね。

そんな欲が絡んだ結果、ぎりぎりまでチエトウインドの復学を待つてみよう、という意見が優勢になった。この場合、チエトウインドが戻れば首席、コーツが監督生で、君が寮長になる。戻らなかつた場合は、コーツが首席で君が監督生だ。その場合の寮長には、アンドリュウ・シーファが推薦された。彼は、非常に仲間の事によく気がつくし、さりげないフォローもうまくいからぬ。

そこで、以上の事を君に計らうと再三連絡を試みたんだが

……前述の通り、君はつかまらなかつた、というわけだ」
ベネットは溜息と共に一度そこで言葉を切り、アイオロスの表情を伺つた。

「始業日が近づいても一向に君とは連絡がとれないし、チエトウインドから退学撤回の連絡もない。仕方なく、我々は連絡のとれる人間の人事から固定した。コーツには最初から連絡してあつたが、シーファに打診する時にはまた少し採めた。もしチエトウインドが戻つてきたなら、寮長は君だという意見が強かつたからね。だが、私は、シーファを推したよ。君とは違つた意味で、非常にこの役職に合つていると思うからだ。

シーファが寮長を受諾した時点で、選択肢は一つになつた——勿論、シーファは知らないことだが——。コーツは首席、君が監督生だ。幸い、監督生は複数居るから、君が登校してから打診しても問題はないだろう、ということになつた。チエトウインドが今後復学しても、彼には役職はない。

これで、万事片付いたはずだつたんだが、突如理事会から横槍が入つた。それで、この打診をしると、私に連絡が来た。不愉快極まることだが」

ベネットは眉を顰め、最後の言葉をややそっぽを向いて吐き出してから言つた。

もしも君が監督生を降りれば、チエトウインドが復学した時に肩書きを得る可能性がある、と。

「明言するが、相手が君でなければ、私もこんな馬鹿げた打診

はしない。チエトウインドが歴代稀に見る優秀な学生なのは言を俟たないが、彼を首席につけるために力のある他の学生が不利益を被ることがあつてはならない。相手が貴族だろうが何だろが、それは同じだ。——だが、もしかしたら、君は自分からそう望むかもしれない、と思つた。私の勝手な憶測だがね。首席をチエトウインドに譲ると言つたコーツのよう……」

これ以上、自分から出す言葉は何も無いというように、ベネットはふうつと肩から息を吐いて慈愛の籠つた眼差しで、唇を真一文字に結んで話を聞いていたアイオロスを眺めた。

どんなに親しく接していても、ベネット自身が述べたように、その歳その歳々での絆のつなぎ方があり、それはもはや教師として子供たちの前に立つベネットには不可侵の領域だ。同学年どうしの特別な絆は、まるで彼らのためだけの特別な言葉と通信手段があるかのようになり、一切他の侵犯を許さない。

理性の塊といった風のシユラ・コーツが示したサガ・チエトウインドへの道理に合わない頑なな姿勢。快活と物事に固執しない事を良しとして見えたアイオロス・エインズワースの裏に垣間見えた、激しく冷たい拒絶の気迫。どんな言葉も、どんな常識良識も、彼らの心を体ごと動かすには至らない。その起爆スイッチは、いつも彼ら同士の中に握りこまれていくからだ。

どんな未来に向かつてても、伸びる事しか知らない生命の塊の彼ら。その中に、確かにかつては自分も属していたはずな

のだが……自分が彼らにしてやれることはなんと少なく頼りない事か。ベネットはちりつと胸に走つた痛みに慌てて息を整えた。

と不意に、ベネットは自分の前で空気が動くのを感じた。アイオロスが立ち上がり自分が見下ろしている。

「首席もしくは監督生の席が空いている事、それが彼がクイーンズベリに戻つてこれる最低必要条件です。他の先生、教授会の方々との兼ね合いもあるかと思いますが、今暫く空席のままにしておいて下さい」

お願いします、の言葉と共に、アイオロスは滅多に見せない真つ直ぐで真摯な眼差しと共に静かにベネットに一礼した。

ベネットは一瞬その清廉な空気にのまれた。そして、数呼吸後に穏やかに質問を口にした。

「チエトウインドが戻つてくれば、彼が首席、コーツが監督生だ。君に役職が無くなつてしまふが、それでもいいかね？」

すつと、姿勢を戻したアイオロスは、ベネットのその言葉にからりと笑つて見せた。

「肩書き欲しくて学生してるわけじゃないんで、俺は。そんな物好き、今も家でふて寝してるヤツくらいですよ」

ベネットは、眩しそうに両の瞳を細めて洒脱な気配を漂わせて首を傾げて自分を見下ろす青年を見上げた。

肩書きは大学進学の際のみならず、その後の社会でもこのイギリスではものを言う。多くの学生がならんかの学生生活の成果を得ることを励みに、クラブ活動や勉学に精を出す。

しかし、確かに、このアメリカ育ちの青年にはそんなものは必要ないのかもしれない。ベネットは溜息と笑いを一緒に吐き出し立ち上がった。

「頼りにしてるよエインズワース。チエトウィンドのような子供にこそ、ここでの生活は意義があるのだと、私は考えるんだ」
ベネットの言葉に、アイオロスは暖かく柔らかな笑みを返した。

アイオロスがその時浮かべた瞳の色は、自らがいとおしむ物が他者からいとおしまられる時に生まれる満足の色であり、その瞳の穏やかさに、ベネットは何かを感じたが、しかしそれを言葉として知覚しなおす事は出来なかった。

「アイオロス」

アイオロスがベネットの書齋を辞し、細い廊下を通り抜けスミス寮の区域に戻ってきた時、ちょうど談話室から第五学年のピオラ・パートの学生達を従えて出て来たアンドリユー・シーファがアイオロスの名前を呼ばわった。

今年の新人団員勧誘の打ち合わせをしていたのだろう。アイオロスにしてみれば、いつも頭の天辺に花が咲いているようなぬるい顔をしているアンドリユーの表情は緊張にきりりと引き締まり、アイオロスを初めとする他のパートの面々が秘かにブレイリードッグ・ファミリーと呼んでいるアンド

リユー以下のピオラ・パートの学生達もまるで戦にでも挑むかのような張り詰めた表情で群れている。

「ちよつと相談したい事があるんだけど、食事まだなら一緒にしない？」

第五学年の後輩達に解散の言葉を告げたアンドリユーは、ノートと筆記具を握り締めてアイオロスの元に小走りに寄つて来た。

「構わんが、飯が不味くなるような話はお断りだぞ」

「いや、これはコントラバスにも重大事項だと思つんだ」

ピオラ属ブレイリードッグ・ファミリーの目下の頭領は重々しくそう宣言した。

「だからさ、チエロ用でも、バイオリン用でもない曲で勝負する必要があると思うんだよ……そりゃ、ピオラの配弦はチエロの配弦と一緒だから、チエロの曲を弾くのは可能だけど、チエロで弾かれちゃったら叶わないんだよ」
最上級生のみが入室を許されるパーで、アンドリユーはビールを片手に熱弁をふるっていた。

結局、食堂では狼が餌を丸呑みするかのように食事を平らげていくアイオロスに相談を持ちかける暇は無く、アンドリユーは必死に自分のメニューを胃の中に押し込み、置いていかれる寸前にパーに場所を移すことを提案してアイオロスをつなぎ止めた。もちろん、アンドリユーの奢りだ。

黙つてアンドリユーの口上に耳を傾けるアイオロスの唇の

端には苦笑が浮かんでいるが、目の前で新入生をかつさらわれた衝撃に沈没しているアンドリュースに、そのことを気にする余裕は微塵もない。

今日の午後、新入生が一人、弦楽器のいずれかのパートに入りたいと八角堂を訪れた。

偶然その場に居合わせたピオラ・パートの五年生、アンソニー・スミスは、勿論喜んでその新入生を八角堂の楽器庫へと連れて行き、さり気無く自らのパートをその新入生にアピールしてみた。

「このパートに入る者は殆ど全員初心者ばかりで先輩も気さくな人ばかり」

(パイオリン・パートからの脱落者とテンポの速い楽器には向いていない人種が揃っているので、そもそも尖がったピオラというのは存在しない)

「パイオリンに比べて難易度が低く、本番には全員が乗れる」

(楽譜にはフラット、シャープなどのイレギュラー記号が沢山あるが、落としてもピオラなのでそれほど酷く文句は言われない。もともと人数が万年枯渴状態なのでいくら技術に心もとなくとも強制的に板上に上がられる)

「楽器は学校からの貸与を使うことが出来る」

(いつも定員を割っているので楽器が余っている)

「人間の声にもっとも近い音域で、音色が心地よい」

(この手の言い回しは、およそ様々な楽器で言われているが、どんなに下手糞でも練習時にパイオリンほど耳に痛い音は出

ない)

言わなかった山ほどの但し書きを飲み込んで、アンソニーは精一杯自分のパートの魅力を上げ連ねてみた。その甲斐あって、一通りの説明を受けた新入生はアンソニーに、ピオラで有名な曲は何か、と訊いてきた。

それは、弦楽器に触れたこともなかった彼にとつては非常に的を射た質問だったが、それこそがピオラの人間には訊いてはならないタブーだった。

アンソニーが新入生に説明を始めた頃八角堂を訪れたアンドリュースは、楽器庫の扉を開けて、窮地にある後輩を助けるべきか、逡巡した。と、背後から黒い人影が彼の立ち位置を追い抜いた。追い越さず、その全身を包む黒衣よりも深い黒い瞳が、訝しげにアンドリュースを見た。

「何をやっているんだ？ そんなところで」

「あ、ああ、シユラ、久し振り」

昨年まで同室だったシユラ・コーツは、制服以外のクロウゼットの中身が見事なモノトーンである事でも有名だ。

何も頭の天辺から爪先まで黒で統一しなくても、という言葉葉を飲み込んで、アンドリュースは手を振って答えて見せた。

「そっちも元氣そうだな。練習か？」

「いや、その……」

言い淀んだアンドリュースにはそれ以上構わずに、シユラは楽器庫の扉を開けた。アンソニーの、少々慌てた声が扉の隙間から零れてきた。

「あ、シユラ先輩！ こんにちは」

「熱心だな。まだ新学期にもなっていないのに」

「いえ、彼が、楽器を見てみたいといふので……先輩は？ 練習ですか？」

「ああ、今ならこも空いていると思つてな」

シユラは頑張れよ、とアンソニーに言い残し、自分の楽器を肩に背負つて楽器庫を出た。そして、ピアノの隣の壁に立てかけてあるパイプ椅子を一脚取り出し、譜面台を広げて、パッハの無伴奏組曲の楽譜を立てかける。つられて外に出て来たアンソニーが、あつ、と口を驚きの形に開けたとき、無伴奏組曲第一番の美しいアルペジオが、高らかに八角堂の広い空間に響き渡つた。

あーあーあー……

絶望的な眼差しで縫う後輩の視線を、アンドリユーは溜息をかみ殺して受け止めた。期待の新生活は、すっかりシユラの奏でるパッハに目を輝かせている。

無伴奏組曲の一番なら、自分でも弾けないこともないけれど……。

本家本元、チェロの無伴奏には叶わない。というより、そもそも、シユラが相手ではどのみち勝負にはしれない。彼のチェロの腕は専科にも引けをとらないのだから。

結局、見学の少年はシユラに練習を傍聴する許しを貰い、アンソニーやアンドリユーと共に帰らなかつた。

「そりゃ、お前、シユラの野郎をそこで通したのが間違いだな。」

その場で足ひつかけて転ばせてやりゃよかつたんだ。あいつは絶対確信犯だからな」

「嫌だよ。そんな、後が怖い」

「Candy-ass! そんなこと言つてつと、全部奴らにもつてかれろぞ?」

アイオロスはくつくつと笑い、アンドリユーは恨めしそうに伏せていた顔を上げた。

「笑つてるけどさ、コントラバスだつて似たような状況だろ? なんかいい宣伝になるような曲ないかなあ……お互い協力しあつてさあ……例えば、コントラバスとピアノのデュオとかどう?」

「そんなキワモノ、あつたか?」

「うー。すぐには思いつかない。日の当たらない楽器同士、絶対ありそうな組み合わせなんだけどなあ」

日が当たらないのがお前等だけだろ、とアイオロスは容赦なく突っ込んだが、アンドリユーは構わなかつた。

「そっだ、コントラバスには、なんかコントラバス弾きしか知らない専属作曲家がいたじゃないか! ポツテなんとか、つていう」

急にアンドリユーが机を拳で叩いて叫び、周囲の迷惑気な視線がカウスターの二人に集中した。

「ポツテシーニだろ? ま、ありやたしかに相当なキワモノだな。確かにバス二本のソナタがあつたが……ピアノとの組み合わせはないぞ?」

アイオロスは周りに視線で軽く詫びつつ、コントラバス二本がフガフガ唸りを上げて絡み合うメロディーを思い出し、すっかり出来上がっている様子のアンドリユーにそう釘を刺した。

ふと、我ながら、よくそんなマニアな作曲家を覚えていたものだ、との思いがアイオロスの頭を掠めた。

ポッテシーニというのはロマン派期のコントラバス弾きで、指揮者としても活躍し、自分のためにコントラバスの曲を十曲近く残した。

ソロ曲など両手両足で余る程度くらいしかないコントラバスにとつては神様のような存在だが、残念ながら歴史に燦然と輝く大作曲家の作品と比肩するような出来ではなく、従ってコントラバス弾き以外の人間には無名に等しい。

一体どこで聞いたものだったか、と記憶を辿り、天井の隅を眺めていたアイオロスは琥珀色の双眸を、不意に、更に遠くを見るように細めた。

——ああ、あいつだ。

まだ銀色の髪が耳のすぐ下で切りそろえられていた頃、宝石石のような緑の瞳を輝かせて、彼がその録音テープを持って来たのだ。

何処へ行くにもアイオロスの後をついてきていた、サガ・チエトウィンドが。

……あいつは、そういうのを見つけてくるのが得意だったからな。

アイオロスは、そう胸の内を呟いて、ギネスを煽った。少し温みかけたその黒いエールは、何故かいつもより味気ない。自由に使える小遣いなんて、アイオロスの半分ほどしかなかったくせに、街へ行つてはコントラバスの曲を探し、CDやレコードを買って来た。そうして、嬉しそうに、「弾いてみたら」と勧めてきた。

オーケストラの曲すらまともに練習しないのに、誰がやるか、と、まともに取り合った事もなかったが……。

サガが、ああいう素直な笑顔をなくしたのは何時頃からだったか。

「ロス、どうでした？」

暫く黙り込んでいたのだろう。アンドリユーが、血色のよくなつた頬をアイオロスの方に向けて覗き込んでいた。

「いや、なんでもない。それより、曲だろう」

「あれ？ 真面目に考えてくれる気になつたんだ？」

酔いの回つて来たアンドリユーが嬉しそうに笑い、アイオロスはつい口をついた言い訳のまずさを後悔した。

「ま、目立つのに越したことは無いからな。お前んとも、俺んとも、今年は気合い入れて招集かけないと後がない」

「うん。それで、さっきの話なんだけども、……僕、実は、ポッテシーニをピオラとコントラバスでやつてるの、聞いた事があるんだよね」

「はああ？」

じゃあ、今までの前振りは何だったんだ？

背中を得体の知れない触手に一撫でされたような不快感に、アイオロスは思いつ切り眉を蹙めた。

「デュエットのうちのどれかだよ。多分。コントラバスの音域だとピアノには低いんで、一オクターヴ上げて弾いてたんだ。ピアノの伴奏もいらぬし、楽譜さえ起こせばなんとかなると思うんだ」

「寢言なら寝ている時に言え。ポツテシーニのコントラバスは難易度高いんだぞ？ お前等がちまい楽器で指回すのとは訳が違う。この俺の何処に、そんな暇があるぞ？」

「でも、このままだと、みんなシユラに新人生とられちゃうんだろ？」

「知るか。新人生集めは五年の仕事だ。俺は二年前十分に働いた」

「でも、演奏が聞きたいって言われたときの模範演奏は、伝統的に最上級生の役目だよ」

「……………」

「君のとは、君以外は五年生の二人が最年長だから、君以外に弾ける人はどのみちいないと思うけど……………」

「じいじいじいじい、カウンターに面肘をつけて見上げてくるアンドリユーの酒臭い息を身を振って避けながら、アイオロスは呻いた。

「ちつ。わかつたよ。どうせこつちにもネタはないしな。一人でやるよりや楽だろ。で、楽譜は？ お前が起こすのか？」

「うん、それは僕がやるよ。サンキュー！」

アンドリユーは嬉しそうに笑い、ニューキャッスル・ブランドエールの追加を注文した。お前、ちよつと飲み過ぎじゃないのか、そう言いかけて、アイオロスは口を閉じた。

酒の力を借りたい気分になることだって、あるだろう。もう自分達は、子供ではない。

「……………」

「あのさ、ロス」

両目を極限にまで細めて旨そうにビールをすすつてから、アンドリユーがぼつりと呟いた。

「サガは、本言に戻つて来ないのかな」

突然触れられた話題に、アイオロスの瞳は一瞬揺らいだが、

「いろいろ、大変なんだろうけど……………」一緒に、最後の演奏会に乗りたいて、サガもそう思つてると思つてただけだから隠した。

「……………」

「アンドリユーはふうつ、と一つ息をつき、僕の思い込みかな、と口の中で小さく呟いた。

「アイオロスは、そのまま黙り込んでしまったアンドリユーを一瞥し、ぞんざいに答えた。

「思つてるだろうよ。今でも、あの音楽バカがソロの機会をそう簡単に捨てるわけがないからな」

アイオロスの無然とした声に弾かれたように顔を上げたアンドリユーの喜色は、「ただ」と続いたアイオロスの言葉にすうつとその色を薄めた。

「それ以外のものも秤には乗つてゐるんだらうよ。自分で乗せたのか、周囲に無理矢理乗せられたのかは知らんがな。——あ、ギネス、もう一本」

初老のウエイターが頷き、アイオロスの前に四本目の瓶を並べた。

秤の上の価値。

未だに、アイオロスが理解出来ない、理解する気もない、数々の次期シユロローズ・ベリ伯爵としての制約だ。

サガがクイーンズベリに入学した頃、秤の皿の一方にはそんな錘ばかりが積み上げられ、もう一方の皿には何も乗せられていなかった。

四年かけて、サガは一つずつ、その空っぽだった皿に彼の信じる価値を積み上げてきた。そしてアイオロスは、それと同時にサガの手で乗せられたのではない錘を彼に捨てさせようとしたが、遂にその目論見は成功しなかった。

「じゃあ、サガに、クイーンズベリに戻りたいって、もつと思わせられればいいんだよね」

唐突に、じつと一人で思案に耽つていたアンドリユーが目を輝かせた。アイオロスはまたザワリとした形容しがたい何か胸の辺りに燃るのを感じて、いい加減、この風向きが怪しくなってきた会話を終止符を打ち、この場から退散しようと腰を浮かしつつアンドリユーに切り返した。

「コンチエルトのソロだけじゃ餌には足りないよ？」

「うん、それも大事だけど——何が一番大事か、ロス、本当は

分かつてゐるんだらう？」

こいつ、説教酒だったのか、と、一瞬アイオロスは天井を仰ぎかけた。サガとの不和の原因について、他人に口を挟ませる気はないが、サガが今学期の復学に積極的でない原因の一つが自分であることにはきつちり目算があつた。

「その件は承済みだ。お前が口を出すことじゃない」

「口なんて出さないよ。勿論！ でも、ロスは、もうサガの事怒つてないんだよね？」

「もう、も何も、別に怒つてない」

「ふ——ん？」

「気色悪い声出すな」

アンドリユーがにんまりと笑い、アイオロスはちつ、と舌打ちした。

コイツのことを大人しいブレイリードッグか何かだけと思つてゐる連中に、この笑顔を見せてやりたいものだ。そう胸中で毒づいたとき、アンドリユーが、急に真顔になつて、しんみりと呟いた。

「そうだよ。サガは、人一倍算計感が強い……そんな簡単に、ソロを下りるようなことはしないとしたい。でも、現実には、サガから手紙が来た。もう、戻つてこないって……。ソリストは、ミス・エヴァンズでも出来る。彼はもう、そう諦めてるんだ。……それなのに、僕には、あの手紙が、誰かに引き止めてほしくてたまらない、と言つてゐるように見えるんだ」

始末の悪い奴だ。

アイオロスは、じつと半分酔った眼差しで虚空を見詰めているアンドリュウの横顔を盗み見た。

アンドリュウの、人の心を推し量る勘の良さは、同期の中でも随一だが、本人はそのことに気付いていない。その特質を買われて寮長に推薦された事など、本人は知る由もないだろう。

「向かない脳味噌使つて心配するな。あいつは戻つて来ると思つとけ。あの音楽バカが、オーケストラをバツクに楽器を弾けるチャンスのみすみす逃すわけがないだろうが？」

アイオロスは、そう言つて、瓶の底に僅かに残つていたギネスを一気に煽り、じゃあな、と片手を上げてアンドリュウを一人バーに残し、階下の自室へ足を向けた。

クイーンズベリは、上級六年生になると生徒たちに個室を与える。

一つには進学の為に勉強に集中できる環境を与えるため。彼等の学年からは実質寮内での就寝時間等の規則は無く、寮に設置されている図書室は深夜まで彼等の為に開かれている。

そして、もう一つ、彼らを一人の大人とみなし、そのプライベートを尊重する為だ。

ヨーロッパの多くの国では「子供」は動物以下の生き物として見なされる。厳しく訓練され躰けられた犬の方が、聞き分けのない子供等より遙かに「個」として認められている。「個」を持つ以前の「人間」である子供は人間ではなく、その自由は厳しく両親や大人、社会から制限される。彼等の判断力は信頼に能わず、無制限な自由は有害以外の何ものでもない。

しかし、一旦「成人」とみなされる時間を迎えば、それまでの規制は一切消え、突如として広大な自由を与えられる。与えられた自由をどう使うか、それはそれまでに学んでいるべき事柄であり、それに足を掬われ溺れ、転落しても誰も追いかけてきて救つてはくれない。

この国には二つの人間しか存在しない。守られ、保護されなければならぬ自由無き被保護者か、全ての波風を自分の力で制御し進んでいく自由を許された「人間」か。

ベッド、机、本棚、衣装ダンス、全てがすつきりこぢんまりと収まったこれから一年間の城となる部屋に足を踏み入れたアイオロスは、大きく窓を開けた。

窓の先には夜気。その向こうには生と木立。

茫洋として真の暗闇でも、ロンドンのようにネオンに照らされた明るい空でもないミス寮を包み込む帳に、アイオロスは、そつと手を差し入れてみた。

彼にとつて、こうして社会的に「成人」と見なされる年になるという事は、限らない可能性ひいては自分自身への真つ向からの挑戦へのファンファーレであり、他人が築き上げた